

## この終わりの時代に

今朝は、「聖なる生活をしよう」という勧めの二段落目からご一緒に御言葉に聴いてゆきます。わたしたちの生き方に関する勧め、つまりキリスト者の人の倫（みち）ということです。今日は第二礼拝のなかで大矢敦嗣さんの洗礼式を行います。イエスを主と告白して洗礼を受け、キリストに結ばれる新しい生活に入る。それは、この手紙に書かれているように「父である神があらかじめ立てておられたご計画に基づいて、聖霊によって」導かれてのことです。そこから半田教会員としての新しい生活が始まる。それは御言葉によって人格と人生と共同体を形作る生涯の始まりです。それがどんな生活であるかをペテロはこの手紙において懇切丁寧に説き明かしている。救われた者の生活とは「聖なる生活」をすることだという。そこでまず問いたいのは「聖なる生活」というライフスタイルがわたしたちの中に有るか、「聖なる生活をしよう」という生き方が理解されているか、今週の説教準備は、そのことを自分に問いかけることから始まりました。たとえば今は夏休みですが、子どもたちですと「規則正しい生活をしよう」という呼びかけがかならず出ますね。ゲームやスマホをいじって夜更かしをしたり、登下校がないわけですから時間にルーズになったり、食事が不規則にならないように生活習慣が崩れないように「規則正しい生活をしよう」という指導がなされます。そういえば今年5月に名古屋学院では高校3年生対象に主権者教育という授業が行われ、わたしもキリスト教の立場から1コマを受け持ちました。これは今年始まった18歳成人を受けて選挙権を得て国政に参加することの意味ですとか、またフィナンシャルプランナーを呼んでお金の使い方のレクチャーもありました。親の同意

がいらなくなったからといって欲望にまかせてクレジットを組んでリポ払いで首が回らなくなったりしないように、身の丈にあったお金の使い方をしようという、これも生き方の勉強です。このように色々な生き方のガイドがあるわけですが、「聖なる生活をしよう」という招きに近いものはないかさらに考えますと、キリスト教主義学校ですと「主を畏れることは知恵の初め」といったように聖句をモットーとしたり、「敬神愛人」と言い表したりしますが、それを実際の学生生活に反映して、将来の行動原理にするまでには人格修養の倫といいますか、長い道のりが必要です。むしろ子どもたちに近いと思われるのは「人に迷惑をかけない生き方をしよう」ですね。「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」これは小さい頃から、わたしも色々なところで聞いてきた気がします。ただこの人に迷惑をかけない生き方というのは、よくよく考えてみますと、つねに人の目を気にする生き方、あるいは人の気持ちに配慮した生き方となるわけで、人の目のないところや、自分が気を使わなくてよいと判断するところでは逆に傍若無人に振る舞うこともある気がします。自分の属する集団や、共同体の外だと、旅の恥は掻きすてであったり、平気でゴミを捨てたりという二重性がある。人に迷惑をかけないという時の「人」が、一体どの範囲の人まで含んでいるか、身内と他人（ほかのひと）、さらに外人（そとのひと）という言葉は、わたしたちが考えている以上に漢字のもつイメージがわたしたちの意識に食い入っているようにも思います。

さて、それでは主イエスに結ばれ、キリスト者と呼ばれるようになったわたしたちは生き方の軸をどこに置いているのでしょうか。どういう生き方を、自分に課しておられるのでしょうか。まず前提となるのが、この手紙の説教を始めてからキーワードとして繰り返しておりますクリスチャンとはこの地上において

仮住まいをしている者という自己理解です。今日の聖書箇所にも「この地上に仮住まいする間」という言葉が使われています。ペテロはこの手紙をポントス・ガラテヤ・カパドキア・アジア・ピディニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たち、つまり父である神のご計画に従って霊によって聖なる者とされ、キリストの血を注ぎかけて頂くために選ばれた人たちに向けて書きました。キリスト者とは、神の一方的な恵みによって選ばれたがゆえに、この地上においては「ディアスポラのパレピデーモスな人々」つまり、離散した仮住まいの者たちであり、そうした者たちが、日曜の礼拝ごとにこのように呼び集められて共に主を賛美しているのです。仮住まいの身という表現は、仮ではない本当の住まいに迎えられる日が来るということ、あなたがたには本当の場所がある。キリスト・イエスが用意してくださっている天の住まいに、父の支配される御許に希望をつなぐことが許されている。旅行に行く前に支度をするように、御国に行く前にどのような支度が願われているかを、ペテロはこの手紙で語っていると言ってよい。金銀というこの地上でしか通用しない富を基準として、すべてを判断するのではなく、朽ちず、汚れず、しぼむこともない永遠の命につながる富がキリストによって用意されていることを基準にせよと説きます。それはキリストが死者のなかから復活されたことであり、生き生きとした希望だと取り次ぎました。この新しい消息、良い知らせ、つまり福音に従って、この地上で辻褄を合わせようとする生活から解放されて、神の招きに与って生活を形作るようにしなさいと言うのです。それが、わたしたちに新しい希望を与えてくださった神の御心に応えて生きる「聖なる生活をしよう」という、神に向けて生きることのススメでした。「神は聖なる方であるのですから、あなたがたも聖なる者となりなさい」。しか

し、それはどういう生活か、ということで説教の冒頭に戻ってしまうのですが、ペテロがここで2千年前のキリスト者たちに語ったことは、神を畏れる生活をしなさいということでした。すべての者を公平に、その行いに従って裁かれる義なる神の存在は旧約聖書を読んでまいりますと実に厳しい。神の前にみずからの正しさをもって立てる人は存在しません。創造主なる神はその聖と義と公正によって、人間を裁くお方です。しかし同時に、その神が愛する神であり、憐れまれるお方であったゆえに、独り子である神がキリスト・イエスとしてこの世に現れることになりました。今日読みました聖書箇所「キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れて下さいました」とありますのは、この恵みの時が来たことを指しています。その正しさゆえに裁く神と、その愛と憐れみゆえに赦す神が、神さまご自身の中で葛藤し、憐れみが正しさを損なうことなく表された結果が、傷や汚れのない子羊のような、と譬えられた御子イエス・キリストの十字架による贖い、流された血による罪からの清めであったのです。贖われた命であるという事実を正しく受け止めること、キリストの血、すなわちキリストの命によって買い戻された。身請けされたというのがニュアンスとしては近い。キリストの尊い血によって贖われた恵みの事実を知ることが、わたしたちの新しい生き方の基礎となる。ここに裁き主が裁かれて、罪人であるわたしども人間の罪をご自身の血、すなわち命によって贖うという救いの奇跡が起こされた。キリストのこの愛を知れば知るほど、感謝の応答が深まってゆく。この執り成しの御業によって、わたしたちは裁き主である方を、イエス・キリストを通して「父」と呼ぶことが出来るようになったのです。本来ならあり得ないことです。しかしそれが神の真実によ

って現実として起きた。そのことをわたしたちに教えてくださり、信じさせてくださるのも神さまの御業、聖霊なる神の働きです。聖霊がわたしたちの群れに降り、信仰を通して働き、神の業を起こして行きます。この消息を弁えて、感謝の応答として御言葉に則って生活を整えることが、ここでペテロがいう神を正しく畏れることと言ってよいでしょう。新しい酒は新しい革袋に入れなさいとイエス様が教えられた箇所があります。新しいぶどう酒は発酵が激しくて古い革袋を破ってしまう。新しい教えを古い生活の中に落とし込もうとすると結局両方をダメにする。尊いキリストの血によって「先祖伝来の虚しい生活」から贖われたゆえに、聖なる生活をするように勧められるのはそのためです。では具体的にどのような生活をしたのか。それについて手紙ではこの後、神の僕として生きる、召使いたちへの勧め、妻と夫といったように教えが述べられて行きます。この部分は現代のわたしたちと社会も産業構造も違いますので単純な比較が難しいところです。もう少し「この地上に仮住まいする間、神を畏れる生活をすべきです」という勧めを、わたしたちにひきつけて考えますと、自分の生活を塩で味付けられた言葉、つまり御言葉にそわせることによって、信仰の言葉で、わたしたちの生活を語れるようにしていくことがキリスト・イエスに従う歩みの始まりとなります。これは難しいことを言っているのではなくて、こうして毎週礼拝に出て、復活の主イエスに見え、わたしたちの希望を確認し、1週間の自分の歩みを、世代の課題として抱えて歩んでいることを神の口から出るひとつひとつの言葉によって審査する。自分が判断するのではなく、主のお言葉がわたしを吟味する。味付ける。そのことの繰り返したと思うのです。するとどうなるか、神の前に出ること、祈ること、賛美することが習慣化されてゆきます。この積み重ね

が、わたしたちを救います。以前、教会員の感話にこういうものがありました。営業職で、人生の難しい局面に直面したクライアントと電話で応対しておられて、最後に「お祈りしています」とつい口に出た、それで相手は正気に帰って、上司に感謝の電話があったそうです。これなど日曜日の礼拝によって聖なる方と向かい合う生活習慣が日常生活に及んでいく例ですね。キリストがわたしたちのために命を捨てて執り成してくださったように、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を「父」と呼ぶことが許されているという、イエス・キリストに結ばれたゆえに特権的に与えられたこの祈りから始まる執り成す生き方は、まさにキリスト者の生き方の中心にくるものです。「人に迷惑をかけない生き方をしよう」という消極的で、結局、世間の目でしか測れない生き方ではなく、公平で正しく、聖なる方でありながら、憐れみ深く、御子をすらわたしたちのために賜った愛による恵みのご支配を現してくださった方に向けて、罪を赦されたことを感謝して執り成しの歩みを生きることは尊いことです。そしてそれはこの地上において「ディアスポラのパレピデーモス」であることを認めて生きるわたしたちにおいて初めて可能な執り成しの働きではないでしょうか。地縁や血縁や利益集団を超える普遍的な正しさをもって、終わりを司る神に向けて生きることは、終わりの時を破滅として迎えるのではなく、神による完成の希望として与えられているわたしたちにしか出来ません。「聖なる生活をしよう」というペテロのこの招きは、完成への道がキリスト・イエスによって開かれたから、それに備えようという喜びのメッセージです。わたしたちキリスト者の日常は、わたしたちの救い主キリスト・イエスが再び来られる約束に縁取られています。この消息を弁えて喜びの歩みをここから始めて参りましょう。 お祈りいたします。